

彫像改変からみた古代ローマ人のメモリア認識

福山 佑子

古代ローマではダムナティオ・メモリアエ (Damnatio Memoriae) と呼ばれる行為が行われていた。これは、亡くなった人物に繋がるメモリアが後世に残ることを妨げるものであり、それゆえ、個々の事例ごとに内容は異なるが、服喪の禁止、公的及び私的な彫像の破壊、碑文からの名前の抹消、資産の没収などが実施されたのである。この行為は元老院が「悪帝」と判断された皇帝に対して行った処分として広く知られていることもあり、従来は、皇帝の神格化と対になる、極めて不名誉かつ苛烈な処分として認識されてきた。しかし、そもそもダムナティオ・メモリアエという言葉は、古代において用いられたものではなく、後世に作られたテクニカルタームであった。そして、この行為が皇帝を中心として検討されてきた背景には、ダムナティオ・メモリアエ研究が二十世紀初頭のドイツにおいて盛んであった国制史やローマ法からの研究に端を発するという事情がある。それゆえに、元老院が「悪帝」に対して行った処分としての姿や、皇帝の神格化と対になる姿のみに焦点が当てられてきたのであった。だが、美術史などとの学際的な研究の進展は、新たな視点を見出しつつある。

例えば、従来の見解において頻繁に言及されるスエトニウスの記述では、元老院によって「悪帝」と判断された皇帝の死後、彼らの彫像は徹底的に破壊されたと記されている。この記述を額面通りに受けとるならば、彫像は完全に破壊されたはずであり、このような見方に従う歴史家も多かったのである。しかし、皇帝の彫像に対するダムナティオ・メモリアエを扱った美術史家のヴァーナーの研究では、現存する皇帝が再利用された例を多数みることができる。例えば、現存する彫像において、カリグラが三十五体・ネロが六十体・ドミティアヌスが二十八体も改変され、転用されている。これは、現代まで伝わっている彫像の数がそれほど多くないことも考えると驚異的であろう。そして同時に、ダムナティオ・メモリアエが行われた皇帝の彫像を再利用し、別の皇帝に作り替えるという行為が、システマティックに行われていた姿が浮かび上がってくるのである。すなわち、皇帝の彫像の改変は、スエトニウスなどの記述における熱狂的な描写とは、実際には異なった様相を呈していたのである。ところで、このような行為は皇帝などに限定された特殊な行為であったのであろうか。これまでの研究では、皇帝などの身分の高い人物に対する苛烈な処分とみなされてきたが、キケロが『アッティクス宛書簡』9.1.26において、他人の彫像の碑文を交換して自らの彫像が建てられることについて、断固とした拒否は示さず、友人に判断をまかせているように、彫像に託されたメモリアを改変し、他人のものにするという行為は、社会的な制裁以外の面においても

頻繁に行われていたのである。このような行為が多数行われていたことは、考古学者のシアーの研究によって実証されているほか、パウサニアスの『ギリシア案内記』(1, 18, 3)、ディオ・クリュソストモス『演説』(31, 141)も言及している。このように、ローマ社会において、メモリアの抹消、彫像や碑文の改変は、決して特殊なものではなく、共和政末期から帝政初期にかけては非常にありふれた行為であったことが見て取れるのである。

以上で明らかのように、これまでダムナティオ・メモリアエは、当初の研究が国制史の範疇で行われたこともあり、皇帝や元老院などの「国家の敵」に対して元老院が行う、苛烈な処分というイメージが持たれてきた。しかし、史料にはこの言葉が存在しないように、ダムナティオ・メモリアエは様々なメモリアを抹消する行為の総称であり、高位の人間に対する社会的制裁以外にも、ダムナティオ・メモリアエに類する行為は行われていた。すなわち、このような行為を一括りにすることで、その政治的意義を強調することは可能であったが、逆にこの点以外の部分が見えにくくなってしまっていた面も存在するのである。

旧ソ連におけるレーニン像の破壊のように、彫像の破壊や改変は体制の崩壊・時代の転換点として捉えられ、その象徴とされてきた。そして、ダムナティオ・メモリアエもこのようなコンテクストの中で捉えられてきたのである。しかし、このような見方や価値観はローマにおけるダムナティオ・メモリアエにおいて、そのまま用いるこ

とはできない。なぜなら、このようなメモリアの抹消が行われた範囲は、時代を象徴する権力者のみではなく、より広い社会層において行われており、このような行為は近年の権力者の彫像破壊ほど「特殊」な例ではなかったからである。そしてこの点には、現代の認識とは異なるローマ人のメモリア認識を読み解く鍵が隠されているのではないだろうか。

デリオ・カンティモーリとイタリア宗教改革史研究

高津 美和

一六世紀イタリアの宗教状況は、長らく、「カトリック改革」あるいは「対抗宗教改革」の歴史概念と共に、教会史の視点から考察されてきた。しかし、デリオ・カンティモーリが一九三九年に発表した『一六世紀イタリアの異端者たち』は、従来の研究の枠組みを超えて、新たなイタリア宗教史研究の可能性を示唆した。彼の著作は、欧米の歴史学界において、古典的名著としての地位を獲得している。しかしながら、日本の歴史学界においては、中近世イタリアの都市・宮廷研究が盛んである一方、宗教について活発な研究が為されているとは言い難い。その結果として、上記の「改革」をめぐる議論さえフォローされておらず、一六世紀イタリアの宗教状況の多様性を指摘したカンティモーリの研究も、然るべき評価を受けら